

漢学から英学へ

—近代日本の文化史的方向転換—

平川 祐弘

平川祐弘でございます。ご懇切なご紹介有難う存じます。また伊東俊太郎様とは同じ東大駒場キャンパスで二人が助手の時から伊東様が京都の日文研へ移られるまで二十六年、ずっとご一緒して私が大学院の主任として伊東様を送る言葉を書きました。それは麗澤大学で編まれた伊東教授を讃える文集にも再録されております。このような機会を与えていただき嬉しく懐かしく存じます。後ほどの伊東様はじめ皆さまのご質問を楽しみにいたしております。

さて本日は私が二〇〇六年に名古屋大学出版会から出した『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク——中村正直と『西国立志編』』という著書に書きましたことを主に踏まえてお話申しあげますが、一度活字にしたことを繰返すだけでは能がない。なにか新味を加えようかと考えまして、前後に今の世界の中の日本研究で、私がこれは良くない傾向だ、と感ずること、私のような学問的立場の者から見ても多少おかしいのではないかと感ずるところ、それはまた私自身がいまどのようなところに学問的に位置するか、という点とおのずと関係するわけでもありますが、そのようなアクチュアルな問題点、学問上・思想上・またイデオロギー上の問題点にもふれて、この際あわせてご説明したいと思っております。

れで私自身のしてきた学問や著書にふれつつ説明させていただきます。(その前後の部分はですす口調のままとし、質疑応答の雰囲気も再現しようとしてみました。本論は用意してきた文章体をそのまま生かしてございます。)

私の書きましたものを日本語英語そろえて講演会場後方にいろいろ並べていただきました。以前にカナダのトロントの大学へ行きましたときもそのように図書を取り揃えて歓迎され、私の母校の東大よりももっとずっときちんと私の図書が揃っておりましたので、有難いやら恥ずかしいやら嬉しいやらの気持がし、学者を迎えるにはこういう歓迎の仕方もあるのかと感心いたしました。本日はお手数をおかけして、並べていただきお礼を申しあげます。私の英文の著書に *Japan's Love-Hate Relationship with the West* 「日本と西洋との愛憎関係」というのがありまして、イギリスの Global Oriental 社から二〇〇五年に出ました。私は自分から申すのも妙ですが、あるいは伊東さんもご存知でいらつしやるかと思いますが、東大の助手時代から毀誉褒貶のきわめて激しい学者でありました。今度英語で本を出したら外国人の書評の毀誉褒貶はさらに激しくなりました。

私はすでに一九八九年という昔に *Cambridge History of Japan* のために *Japan's Turn to the West* という英文の長い章も書きました。それをその *Japan's Love-Hate Relationship with the West* の中にあわせて入れておきました。その章が実は本日のお話の主題なのでございます。そしてその *Japan's Turn to the West* を具体的に体現した一人物についてのちほどお話申しあげるつもりなのでありますが、まず英語の章の題についてご説明いたします。turn to the right とか turn to the left という英語表現は、皆様ご存知の通りで、自動車などを運転する際「右へ曲る」とか「左へ曲る」ということでもあります。私は明治維新を文化的に定義して「日本が目を西洋に転じた時」*Japan's Turn to the West* と呼んだのであります。この講演のお誘いをいただいたころ、たまたまその章を

日本語版に書き直しておりました。多分二〇〇九年には名著刊行会から書物になるかと思いますが、それで本席でもそれについてお話ししあげようとする時は思った次第でございます。実はその Japan's Turn to the West の日本語の題に苦労いたしましたして、名著刊行会のためには『古代中国から近代西洋へ——明治日本における文明モデルの転換』という題にいたしました。そしてこの「古代中国から近代西洋へ——明治日本における文明モデルの転換」の立役者の一人が本日お話し上げる中村正直なのであります。七月にこの講演のお話をいただいたときは『漢学から英学へ——近代日本の文化史的方向転換』という題でお話するとご返事いたしました。

Japan's turn to the West という題の含意は、遣隋使以来、目を中国大陸に向けてきた日本が、明治維新を境に視線を西洋に転じた、文化政策上の大転換のことであります。いいかえると、日本の知識人が漢籍を読むことをやめ、英語をはじめとする洋書を読むようになった、幕末維新の方向転換のことでございます。その最大の立役者は脱亜入欧の福沢諭吉と洋学者に転じた漢学者中村正直の二人なのです。幸田露伴にいわせると明治初年は福沢よりも中村の方が尊敬もされもし影響も強かった、由であります。中村は福沢より三歳年上で一八三二年に生まれ一八九一年、明治二十四年に死にました。ただしその名著が『西国立志編』と『自由之理』という翻訳書でありましたために後世の研究者の注目する度合いが福沢に比べよほど下のまま今日に至ったのでございます。

さて私は日本が古いアジアの旧套を脱して西欧の近代にはいったことそれ自体は、まことに健全なことであり、肯定する立場にありますが、単純に漢学者より洋学者を良しとする者ではありません。むしろ一身二生を送った二本足の学者を良しといたします。しかしそれでも日本人の第一外国語が「脱漢入英」となったという意味での「脱亜入欧」の動きは不可避的であったと考えます。戦後の日本左翼の歴史学者の中には福沢の「脱亜入欧」の主張が日本人にアジア蔑視の観念を植え込んだとして、その福沢を非難するのが流行となりましたが、日本人の第一外国語が漢文から英語に変わったと

いうことは客観的な歴史的事実でありまして、価値論的に判断するだけでは十分に歴史観察ができないのではないかと私は感じます。「脱亜入欧」を非難なさる方に日本人の第一外国語の問題として「脱漢入英」と申すと、これは客観的な文化史的事実でありますから、皆さま目を吊り上げてお怒りになれません。しかしこの第一外国語の変化は長い目で見ますと漢文で書かれていた儒教倫理から日本人が次第に離れ出したことをも意味するので、道徳科学研究所に関係の皆様にはその辺が非常なご関心事であるかと存じます。

さてケンブリッジの日本史執筆に際し、もともとはプリンストン大学の日本史のジャンセン教授が考えた英文の題でありました *Japan's Turn to the West* の適訳に私は窮しました。東大史料編纂所の金井田教授は「日本の西洋への傾斜」という訳を提案しましたが、しかしそれでは文脈的な「日本が目を西洋に向けた」という方向転換がはつきり伝わらないと思うのです。それで来年に名著出版会から出すその本の日本語版の標題としては内容をパラフレーズした『古代中国から近代西洋へ——明治日本における文明モデルの転換』を用いることといたしました。ではなぜ中村正直を話題の中心に選んだか、と申しますと、それは中村は幕末期の日本で昌平黌のお儒者、すなわち筆頭教授であった、ということは一八六〇年代の日本で最高の儒者として認められていたということでもあります。その中村正直は明治初年に福沢諭吉と並び称されたほどの啓蒙思想家となった。というのはこの幕臣はヴィクトリア朝イギリスへ一八六六年という明治維新に先立つ二年前に渡航して西洋民主主義を発見した。それで立憲君主制という君主の権力の制限を考えた。ミルの『自由論』をよく学んで日本に紹介した。それから資本主義社会を支える倫理とは一体何かを学んだ。それが『西国立志編』の翻訳となるのであります。中村という当代きつての俊秀が「洋学に転じた漢学者」として帰国して成し遂げた事業の文化史的意味についてこれから述べたいと思います。実は一八六〇年代の中国でも朝鮮でも儒者が西洋に行くということがそもそも考え難いが、儒者が洋学者になることなどおおよそあり得な

った、という感想を大陸でも台湾でも韓国でも聞きました。それでなぜ日本にはそのようなことが起りえたのか、という問題についても考えてみたい。

さてはじめに巨視的に歴史を眺めます。

アジアには仏教の影響を受けた地域があります。その中で漢字文化圏とでも申しますが、仏教も漢訳仏典を介してひろがった東アジアという地域がある。そこにはまた儒教もひろまりました。中国・朝鮮・ベトナムなどは儒教の古典を中心に科挙の試験で官吏を採用した。西洋人から見ると日本人や中国人は外見だけではなかなか区別がつかない。ところがそのきわめてあい似ているかに見えた国の中で日本が明治維新以後近代国家として大躍進をとげた。一九六〇年代はなぜ日本だけが、といわれていましたが、そのうちにまず儒教文化圏の国々がテイク・オフし次々に産業化が始まりましたから、この日本だけを特別視する見方の近代化論は多少影が薄くなりました。

さて日本の学者を西洋学者と東洋学者に二大別すると、覚えた西洋語の単語の数からいうと私は断然西洋学者なのですが、それでも韓国にも大陸中国にも台湾にもシンガポールにも頻々と出かけております。それで東アジアの知識青年とつきあう機会もよほど多くありました。そうすると第一に帝国主義国家であった日本に対する警戒感や敵意も強い。しかし第二に明治維新以来の日本の近代国家の建設と、ある意味ではその継続である戦後の日本の経済復興に対する讃嘆の念も強い。一七八九年はフランス革命でした。その百年後の一八八九年は明治二十二年で明治憲法が公布されました。そのまた百年後が一九八九年で平成元年ですが、その年の六月四日が天安門事件です。その前後に教えた中国の学生は日本と中国の差を強烈に感じましたから、日本で博士号を取った人は中国へ帰るよりも日本に残ることを希望する人が多かった。近ごろは中国も経済成長で皆さん自信を回復しましたからナシヨナリステイックな発言をする留学生、中華思想にとらわれる中国人もふえましたが。それで少し

前までは、同じ東アジアの国でありながら、なぜ日本と中国がかくも異なる発展の仕方をしたか、ということが各国の学者の関心の的となりました。いわゆる近代化論がそれで盛んだったわけでありませぬ。

ただしそれは国外の話でありまして、日本国内ではマルクシズムが猛威をふるいました。政治勢力としての共産党の議席は多くなかったが歴史学科の内部では唯物史観が主流でした。ここでたいへん個人的な体験を申しあげます。私は昭和二十三年に旧制の一高にはいりました。全寮制でした。中寮十六番という部屋にはいったら、社会科学研究会というのですが、その社会科学研究会というのは面の看板でありまして、正体は共産党細胞みたいな部屋でありました。私は竹山道雄先生いうところの一高の「モスクワ横町」の住人にそれと知らずになってしまったわけであります。社会科学研究会は大世帯で二つ部屋を持ち隣にはソ連研究会とか少し先には中国研究会などがあり、私は上田建二郎と同室だった。後の共産党の委員長の不破哲三です。その部屋の雰囲気は社会科学研究会というのとはなわちマルクシズム研究、その部屋では暴力革命の必然性を説き、社会主義の優越を説き、私はほとんど行きませんでした。がデモがあれば何人かの人は必ずデモに行く。部屋には志賀義雄が来る。壁には毛沢東の言葉が墨で書いてある「情熱は湿れる松明の如く燃やせ」などというのは今でも覚えています。寮歌は「赤光る星」というくだりをとくに力をこめて歌う。皇居前広場に行くところでは野坂参三が演説している。第一次世界大戦後世界の三分の一は社会主義になった。第二次世界大戦後中華人民共和国が成立するに及んで世界の三分の一は社会主義になった。自分たちが生きている間に日本も必ず共産党の天下になる。早く党にはいれ、などと上級生がいつているが、私は河合栄治郎などを読んでいます。それだから反動と呼ばれる。寮というところは洗脳機関としてはきわめて有効な場所です。から、こちらに相当強烈な自我があっても朱にまじわれば赤くなります。私たちの学年は一年きりで旧制高校が廃止され、寮を出たので、それほど入党した人は多くなかった。しかし寮のその部屋を

出た時は、ほっとしました。その部屋ではエンゲルスやマルクスを読まされる。『価値・価格及び利潤』というのを読み出した時に私が若いのに質問した。そしたらチューターと称する上級生が答えられなかったからでしょうが、高飛車に「マルクスが間違うはずはありません」と言った。その時これは科学的社会主義などといったが、科学的なものか、一種の新興宗教の団体だな、と私は信者の中にいる異教徒のような気分になりました。私の中学以来の友人に共産党に入党し後に除名され、あたら秀才が人生を棒に振ったという感じの者がいて、早く亡くなりましたが、その友人の日記に「平川は社会科学研究会のようなどころで皆に逆らうような質問をよくあれだけできるものだ」とけなしたのか褒めたのか書いてあった。なんだ、彼はマルクスがわかったような顔をしていたが、そうだったのか、と後で思いました。私はブルジョワの坊ちゃんで、外国語の勉強ばかりしていて変な質問をする少年、と思われていました。いきなり手を握られて「お前の手はプロレタリアートの手ではないな」などと酔っ払ってからされました。

なにしろ当時は歴史には発展段階があり、法則性をもって進歩すると思われていた。これは福沢諭吉も『文明論之概略』で野蠻・半開・文明と述べているし、福沢が模範とした西洋の歴史家・歴史哲学者の多くが進歩の思想にとりつかれていたから人間個人に発達する法則があるように国民全体に発達する法則があると多くの人が思ったのは無理はありません。西洋の歴史の発展は日本も後追いすると歴史が単線的に発展すると思っているから、労働派はその歴史法則をあてはめて明治維新は一種のブルジョワ革命だといひ、講座派は日本資本主義の発達における封建遺制の残存を強調した。フランス文学科へ行つた連中は日本は市民革命を体験していないから前近代的だとかいった。日本の過去も現在も否定的価値しかなくて、当時はどのような解釈にせよ、封建的か、絶対主義的か、資本主義的か、いづれにせよ、どの体制も農民と労働者の搾取の上に成り立っている、とされた。歴史も経済の観点から解釈して、徳川体制も明治体制も、両方とも否定的にとらえる価値判断を下しました。これは敗

戦後の日本は駄目だ、日本は駄目だという挫折感によくマッチした見方でした。

しかし当時の私は唯物史観の学者の書く文章が馴染めなくて反撥を覚えました。社会経済史は御免蒙って文化史に興味というか救いがあった。それも一國文化史でなくて西洋文明のチャレンジにリスボンスする日本、西洋を学んで日本に近代文化を作った鷗外や漱石に関心があった。生意気な話ですが鷗外や漱石が私のロール・モデルだとひそかに思っていました。そんな私のことを「将来大学の教授にでもなろうなどと思っている人間は革命の暁には死刑だ」などと脅すのがいて、小野二郎いいましたが、もっともその本人も後に大学教授になりました。しかし暴力革命の可能性があると思われていた間は、共産主義の悪口はおおっぴらにはいえませんでした。

私は森鷗外や夏目漱石のような存在は戦前戦後を問わず価値がある、とずっと思っていました。そのように日本の過去にも未来に連なる貴重なものがあることを信じられる国民は私は幸福だと感じます。ドイツ人の悲慘は敗戦後はドイツ文化に自信を失いゲーテを尊ばなくなってしまうことにも感じられるのではないか、と思います。それで私は歴史を一國単位の単線史観で見るのではなくて優越した文明の挑戦に対する後発国の応戦という角度からも考えるようになりました。そのような文明と文明の関係を専門に研究するような学問は個人の頭では考えることは出来ませんが、大学の学問世界ではなかなか市民権を持ち得ない。伊東先生は科学史科学哲学という場で活躍されましたから文明史観にもしきりに言及されました。私は比較文学比較文化の大学院で仕事をしたので主に文学者を対象にして文化と文化の交わる接点を多くとりあげて研究しました。というのは最初の内は日本の比較文学研究というのは日本の作家思想家が西洋からどのような影響を受けたか、という影響・被影響の研究がもっぱらだったからであります。森鷗外が西洋の文学をどのように翻訳したか、上田敏が西洋の詩を『海潮音』にどのように訳したか、それがだんだん研究分野が拡大して、日本人の外国体験の調査にも手を広げ始めた。私の先生は島田謹二という方で『ロシアにおける廣瀬武夫』という著書で日本の

比較研究者として学者としてのアイデンティティーを確立されました。この島田先生のご本の刺戟を受けた日本の作家は司馬遼太郎で『坂の上の雲』は明治日本を肯定する国民文学となりました。私は『和魂洋才の系譜』が博士論文で、これは寿命の長い本で、一昨年も平凡社ライブラリーからまた出版されましたが、森鷗外を中心に日本における西学東漸の明治を肯定的に見ていますから、中野重治氏の激怒を買いました。

それで私は純粹に文学の研究でなくて、詩や文学作品を材料にして国際文化関係論、英語でいうと *intercultural relations* ともいうべき仕事が自分の分野だと思っようになりました。伊東さんと同じで私も外国語に非常な関心があつて、複数の外国語を知り複数の国に長く滞在しているから、おのずから比較ができる。外国語と母国語を結ぶと、知識がばらばらの点でなく線となる。それに第二外国語が加わると、知識は面となり、遠近感覚がついてくる。さらに加わると、見方が立体的になり、バランスが取れてくる。すくなくとも特定国への一辺倒はしなくなる。文化の三点測量が可能になる。歴史が立体的に見えてくると、特定の理論とか特定のイズムを借りてきてそれを当てはめて論文を書くということはおよそしなくて済むのではないか、少なくとも私は理論を借りてこなかった。私は戦争中から戦後にかけて英才教育特別科学組に選ばれて理科教育ばかり受けていたので、伊東さんと知りあつた最初から「平川さんは理科的ですね」といわれましたが、理科的だから逆に理論信奉はしなかったのかもしれない。むしろ従来の通念を破るような結論をはっきりとわかるように実証的に書いてきました。三十代の末からは目の前に次々と面白い問題が目に見えてきたから、論文を書くのが面白くて堪らなくなつてそれを調べ書いて本にまとめて外国でも発表しているうちに七十六歳になつていた、という感じであります。それだから大学院の教授としても学生の主体的意志を尊重して研究の主題とか方法論を押し付けるといふことは一切しませんでした。本居宣長が『初山踏』に書いた教えは学問を始める人にも教える人にも大切な良い教えだと思つております。以上で私の比較研

究者としての方法論ともいえぬ方法論的反省を一応述べました。では本論に入ります。

中国と異なる日本文化の特色とは何であろうか。日本は平安朝の昔には女性文化がたいへん栄えた。『源氏物語』を読むと、千年前の日本人の心理がこれほど洗練されていたのか、と驚嘆せずにはいられない。男と女の心理は昔も今も変わらない、ということをつくづく感じさせられる。世界的に評価される日本人を一人選べといわれたら、それは『源氏』の作者紫式部という女であって日本の男ではないであろう。かつてそれだけ活動した日本の女性の和文の文化は、ではなぜ衰えたのか。それは日本が武家が支配する社会となったからであろうが、それだけではない。日本に漢文の文化が伝わって、とくに徳川時代には儒教がひろまって、それが学問世界の主導権を握ったからである。その孔子の教えは男性中心主義であった。『論語』の中に、

子曰く、ただ女子と小人とは養ひ難し。これを近づくれば則ち不遜、これを遠ざくれば則ち怨む

とある。貝塚茂樹は「世界の名著」で孔子を弁護して、この女子と小人とは使用人をさし、女性一般ではない、と釈明した。しかし女というのは大事にしてやればつけ上るし、距離をおいて遠ざけると怨む、という観察にサイコロジカルな真理がふくまれており、そこに本当のことがいわれている、と世間を感じたからこそ『論語』は広く尊ばれてきたのである。

ところで東アジアでは清朝の中国もその周辺のベトナムも朝鮮も日本も、孔子の教えを尊ぶ儒教が何百年もの間、学問の中心であった。その知的世界の言葉は漢文であった。徳川日本の学問の中心は江戸お茶の水にある昌平黉で、そこでは漢文による学問、漢学とか儒学とか呼ばれる学問が教

えられていた。

中村正直は私よりほぼ一世紀前の人である。一八三二年に生まれ、その昌平黌で学び、成績優秀で拔擢され母校の昌平黌の首席教授となった。いいかえると幕末期の日本で一番優秀な漢学者とみなされた人である。ところで昔も今も真に優秀な学者のある者は自分の専門だけに跼蹐しない。ペリー來航の国難に際会し、中村は漢文のみかひそかにオランダ語を学び、ついで英語も勉強した。そして一八六六年、徳川幕府が初めて留学生をイギリスに送り出す時、志願してロンドンへ渡った。世間は長い間中村はロンドンへ渡り理工系の勉強をする予定の十二名の二十歳前後の青年たちの徳育面での監督として選ばれたと解釈していたが、そうではなかったことが中村家の仏壇から中村の西洋渡航願いの文章が昭和四十年代に出て来て判明した。中村は、年少の留学生たちは西洋文明の形而下の理工系の学問を学びに行くが、その若者たちと違って自分は西洋文明の精神面を研究したい、と申し出て、その願いが幕府当局に容れられたのである。中村が尊敬した佐久間象山は「東洋道德西洋芸術」すなわち、東洋は道德がすぐれ西洋は技術がすぐれる、と言ったが、中村は、西洋は形而下の実学の面だけではなく、政治とか道德とかの面でも東洋より進んでいるのではないか、と予感していたのである。佐久間の「東洋道德西洋芸術」を別の言い方で述べたのが「和魂洋才」で、日本人はなぜこのような文化史的方向転換をしやすかったかという千年前に「和魂漢才」という外来文化摂取の方式がすでにあったからである。『源氏物語』の「乙女」の巻に出て来る。日本人にとって文明は海外から渡ってくる。しかし中国の人にとって文明は自国の過去から伝わってきた。日本人は漢文を捨てて英文を学ぶことはそれほど抵抗がないけれども中国人は漢文を捨てたら自分のアイデンティティーがなくなってしまう。中国人は外国文化摂取についての歴史的記憶が稀薄でロール・モデルが極めて少なかった。

ロンドンで中村は何を学んだか。中村は帰国報告にこう書いている。

余尚ホ記憶ス、童子ノ時、清英兵ヲ交ヘ、シバシバ大イニ捷チ、其ノ國ニ女王有リ。維多利亞ト曰フト。即チ驚キテ曰ク、眇呼タル島嶼、女豪傑ヲ出ス。スナハチシカリ、堂々タル満清、反ツテ一箇ノ男兒無キヤト。後ニ『海国図志』ヲ読ム。曰フ有リ、英ノ俗貪ニシテ悍、奢ヲ尚ヒ酒ヲ嗜ム、タダ技芸靈巧ト。当時謂テ信然トナス。前年英都ニ遊ビ留マルコト二載、徐ニ其ノ政俗ヲ察スルニ、以テ其然ラザルヲ知ル。今ノ女王ハ尋常ノ老婆、飴ヲ含ンデ孫ヲ弄スルニ過ギザルノミ。而シテ百姓ノ議會、権最モ重シ。諸侯ノ議會コレニツグ。

中村は『海国図志』の著者魏源の西洋認識は間違っている、と判断した。中村は西洋起源の「百姓ノ議會、権最モ重シ」とする議會制民主主義の価値を認めた東アジアで最初の人である。また民主主義は社会を構成する個人個人の価値の集大成であって、上に皇帝とか主席とか総書記とかに偉い人がいれば良い、というものではない、むしろ逆である、ということに気づいた。上に偉い人がいればいるほど下の人民は悲惨な目にあう。だから専制君主や独裁者の恣意をいかにして制限するか、そうすることによって人民の自由を守ることができる、というミルの考え方を中村は日本に紹介した。中村の政治思想家としての功績はミルの *On Liberty* 『自由之理』を平易に翻訳紹介して日本に立憲君主制の道を開いたことであろう。次の引用の「論ニ曰ク」の論とはミルの論である。

論ニ曰ク、国ニ自主ノ権有ル所以ノモノハ、人民ニ自主ノ権有ルニ由ル。人民ニ自主ノ権アル所以ノモノハ、其ノ自主ノ志行有ルニ由ル。(中村『諸論』より)

真の民主主義は民意を重んじ、選挙によって代議士を選ぶ。孔子に代表される中国人の国の統治に

ついでと考え方は「民ハ由ラシムベシ、知ラシムベカラズ」といった。それは「上意下達」といった政府中央の意思を下に押し付けるが、民衆の意思を上にも汲み上げることには熱心ではなかった。これは中国の伝統で大陸では今でも本質的に変わらない。それに対しミルの発想は「民ハ知ラシムベシ、由ラシムベカラズ」であった。ミルは民衆にきちんとした情報を与え、政府やお上に頼るよりも自主自立の精神で自力で自分を助けることが大切だ、と説いた。これが長い目で見れば中村の啓蒙思想家としての第一の功績であろう。

第二の功績は、土農工商の階級社会が消滅し、競争社会に突入した明治の日本では「セルフ・ヘルプ」が大切だ、ということこそをスマイルズの *Self-Help* を『西国立志編 原名 自助論』と題して訳すことで日本人に伝えたことである。その冒頭を読んでみよう。

第一編 報国及ビ人民ノ自ラ助クルコトヲ論ズ、

彌爾ミル曰ク、一国ノ貴トマルルトコロノ位あか価かハ、ソノ人民ノ貴トマルルモノノ、合併がふべいシタル位價ナリ、

(一) 自ラ助クルノ精神

天ハ自ラ助クルモノヲ助ク (Heaven helps those who help themselves) ト云ヘル諺ハ、確然經驗シタル格言ナリ、僅カニ一句ノ中ニ、歴あまク人事成敗ノ實験ヲ包藏セリ、自ラ助クト云コトハ、能ク自主自立シテ、他人ノ力ニ倚ラザルコトナリ、自ラ助クルノ精神ハ、凡ソ人タルモノノ才智ノ由テ生ズルトコロノ根源ナリ、推シテコレヲ言ヘバ、自ラ助クル人民多ケレバ、ソノ邦國、必ズ元氣充實シ、精神強盛ナルコトナリ、

他人ヨリ助ケヲ受ケテ成就セルモノハ、ソノ後、必ズ衰フルコトアリ、シカルニ、内自ラ助ケテ爲ストコロノ事ハ、必ズ生長シテ禦グベカラザルノ勢アリ、蓋シ我モシ他人ノ爲ニ助ケヲ多ク

爲サンニハ、必ズソノ人ヲシテ自己勵ミ勉ムルノ心ヲ減ゼシムルコトナリ、是故ニ師傅ノ過嚴ナルモノハ、ソノ子弟ノ自立ノ志ヲ妨ゲ……

英文の冒頭はこうである。

“Heaven helps those who help themselves” is a well-trying maxim embodying in a small compass the results of vast human experience.

中村の翻訳『西国立志編』は明治三年に木版で世に出たが、日本で英語の書物が一冊まるごと訳された最初である。十九世紀の後半世界最大の国は英国だった。産業革命後の英国はヴィクトリア女王の下で世界第一の国として繁栄を謳歌していた。その英国産業文明の偉大の秘訣は『西国立志編』に書かれているというから、明治の若者はこの本に飛びついた。中村正直訳の『西国立志編』は福沢諭吉の『西洋事情』と並んで明治日本の最大のベストセラーとなった。『西国立志編』には従来のほかの修養書の類と違って産業国家を建設するためには発明家や企業家が活躍しなければならぬことが具体的に説いてある。『西国立志編』には中村は達意平明な漢文で「叙」をつけたが、その漢文のおかげで中国や韓国から来日した人もその思想を読みとることができた。

福ナルカナ今日西国ノ民ヤ。古ノ帝王ト雖モ、庸テ何ゾ及バンヤ。昔ハ方隅自ラ封ジ。智識狭隘ナリ。今ヤ四海交通シ。学問淵博ナリ。昔ハ教化明ラカナラズ。風俗慘刻ナリ。今ヤ神明ヲ崇敬シ。志行虔誠ナリ。昔ハ君上權ヲ専ラニシ、民ハ奴隸ノ如シ。今ヤ人自主ヲ得テ、共ニ公益ヲ謀ル。昔ハ法教禁有リ。人心ヲ強、迫ス。今ヤ民ノ自ラ扱ブニ任セ。王ハ問ハズ。昔ハ俗勇悍

ヲ尚^{たふ}ビ。動^やモスレバ仇^{きう}隙^{くわ}ヲ生^なズ。今ヤ人道^{たにん}芸^ぎヲ嗜^たミ、互^たヒニ友^{ゆう}愛^{あい}ニ篤^{とく}シ。昔^{せき}ハ商^{しやう}賈^が貿易^{ぼく}シ、官^{くわん}府^ふ限制^{げんせい}ス。今ヤ其^まノ自然^{じぜん}ニ信^{まか}セ百^{ひやく}物^{ぶつ}亨^{かう}通^{つう}ス。昔^{せき}ハ工^{こう}事^じ盛^{せい}ンナラズ、貨^か財^{ざい}生^{せい}ゼズ。今ヤ物^{ぶつ}料^{りやう}輸^{しゆ}入^{にゅう}シ、製^{せい}造^{ぞう}輸^{しゆ}出^{しゅつ}ス。昔^{せき}ハ房^{ぼう}屋^{いつ}庫^こ少^{せう}、規^き制^{せい}備^びワラズ。今ヤ華^{くわ}堂^{たう}雲^{うん}ニ入^いリ、工^{こう}巧^{こう}ヲ究^{きゆう}極^{ごく}ス。昔^{せき}ハ器^き皿^{びん}粗^そ澁^{じふ}ニシテ、資^し生^{せい}ノ缺^{けつ}クル有^あリ。今ヤ共^{きう}具^ぐ精^{せい}美^みニシテ、心^{しん}身^{しん}快^{かい}適^{てき}ナリ。昔^{せき}ハ盤^{ばん}饌^{じゆん}烹^{ほう}調^{てう}スルニ、唯^たダ土^ど物^{ぶつ}ヲ供^{こう}ス。今ヤ唐^{たう}茶^{ちや}竺^{ちく}糖^{たう}、朝^{ちやう}函^{ほん}夕^{しやく}濡^にス。昔^{せき}ハ山^{さん}海^{かい}遠^{えん}濶^{くわ}ニシテ、跋^{ぱつ}涉^{せつ}艱^{げん}難^{なん}ス。今ヤ火^か車^{しや}、汽^き船^{せん}、安^{あん}坐^{あざ}シテ遠^{えん}クニ行^{かう}ク。昔^{せき}ハ天^{てん}涯^や地^ち角^{かく}、夢^む魂^{こん}スラ達^{たつ}シ難^{なん}シ。今ヤ電^{でん}報^{ほう}急^{きゅう}ヲ告^こゲ、千^{せん}里^り面^{めん}談^{たん}ス。昔^{せき}ハ街^{がい}衢^く夜^や黒^くク、崔^{くわい}符^ふ竊^{せき}ニ発^{はつ}ス。今ヤ衢^{くわい}燈^{とう}昼^{じゆ}ノ如^{ごと}ク、鞞^{けん}擊^{げき}シテ肩^{かた}ヲ摩^まス。昔^{せき}ハ鴈^{がん}魚^{ぎよ}便^{べん}ナラズ、急^{きゅう}難^{なん}ニハ聲^{せい}ヲ吞^{とん}ム。今ヤ一^{いつ}束^{しゆく}一^{いつ}錢^{せん}、四^し境^{けい}ニ達^{たつ}ス。昔^{せき}ハ貧^{ひん}氓^{ぼう}傭^{よう}工^{こう}、金^{きん}ヲ得^{とく}レバ輒^{すなは}チ使^しフ、今ヤ銀^{ぎん}鋪^ぽ收^{しゆう}買^{まい}シ、子^しヲ加^かヘテ償^{ちやう}還^{えん}ス。昔^{せき}ハ簡^{かん}冊^{さつ}奇^き珍^{ちん}、富^ふ人^{にん}モ聚^{くわい}メ難^{なん}シ、今ヤ書^{しよ}籍^{げき}充^{ちゆう}溢^{いつ}シ、寒^{かん}士^しモ致^ちシ易^いシ。昔^{せき}ハ朝^{てう}ニ秘^ひ景^{けい}多^たク、野^やニ鬱^{うつ}衷^{しゆう}有^あリ。今ヤ廟^{べう}論^{ろん}巷^{かう}議^ぎ、日^{にち}ニ萬^{まん}紙^しヲ印^{いん}ス。蓋^{がい}シ今^{こん}ニ溯^{さく}ル五^ご十^{じゅう}年^{ねん}之^の前^{ぜん}、之^の二^に百^{ひやく}年^{ねん}之^の前^{ぜん}ニ比^ひスレバ、則^{すなは}チ又^{また}高^{かう}下^げ霄^{せう}壤^{じやう}之^の異^い有^あリ。嗚^{めい}呼^こ、此^{こゝ}クノ如^{ごと}キノ福^{ふく}運^{うん}、何^{なに}ニ由^{よし}テ致^ちスヤ。教^{きやう}化^か日^{にち}ニ明^{めい}ラカニシテ、人^{にん}心^{しん}善^{ぜん}ニ向^{むか}嚮^{かう}フノ效^{けう}ニ非^ひザル無^なキヲ得^{とく}ンカ、然^{しか}リト雖^{すなは}チモ、水^{すい}火^かノ理^りヲ究^{きゆう}メ、機^き器^きヲ創^{さう}造^{ぞう}スル者^{しや}有^あルニ非^ひザレバ、即^{すなは}チ德^{とく}正^{せい}シト雖^{すなは}チモ、用^{よう}利^りナラズ、生^{せい}厚^{こう}カラズ、此^{こゝ}レヲ思^しヘバ、即^{すなは}チ機^き器^きヲ創^{さう}造^{ぞう}スル者^{しや}ノ功^{こう}徳^{とく}見^{けん}ル。

中村正直が訳した『西国立志編』にはイギリスの産業化に貢献した人の苦心が如実に書いてあった。この本が日本の工業化の国民的教科書と考えられる所以である。

中村たちの一行が一八六八年早めに帰国したのは、自分たちを英国留学に送り出した徳川幕府が瓦解して送金が途絶えてしまったからである。インド洋を横切って戻った時、江戸はもはや江戸でなく東京になっていた。幕府方の中村は都落ちを余儀なくされた。幕府方の若者は将来に希望がもてなく

なっていた。沼津に塾居した中村は当初はそうした失意の人を励ますつもりで「天ハ自ら助クルモノヲ助ク」という *Self-Help* の日本語訳を始めた。するとその訳本が思いもかけず明治の最大のベストセラーとなったのである。中村正直は幕末維新の日本で一番優れた漢学者といわれた人だった。その儒者が西洋へ行って勉強し、西洋研究者となって、当時の言葉を借りれば洋学者となって帰国した。だから世間はこれからは漢学でなくて洋学、とくに英学の時代だと感じたのである。そしてその人が西洋文明の偉大の秘訣はこの本に記されていると説いたのである。世間が飛びついたので無理はない。

いま引いた「自助論第二編叙」には「古ノ帝王ト雖モ、庸テ何ゾ及バンヤ。」と出ている。儒教では古代の聖賢や堯舜の時代が理想であった。しかしそのような古えの帝王の盛代であろうとも、今日の西洋の繁栄には及ばない、というのが中村の見方である。いいかえると中村は古代中国を文明のモデルと見立てる従来の儒者の考え方を排し、近代西洋を日本が学ぶべきモデルに切り換えた。この日本の文化的な方向転換を英語でいうと *Japan's Turn to the West* と「う」ことになる。

福沢諭吉は漢学者の旧弊を笑って「その効能は飯を食ふ字引に異ならず。国のためには無用の長物」(『学問のススメ』)とひやかした。諭吉は明治維新前に三度も西洋へ渡ったことのある西洋通だったから、彼の『西洋事情』は日本の開国前後に売れに売れた。吉野作造は中村と福沢の二人を評して、

影響感化の大なること、福沢翁の著訳と並んで、空前と称せらる。

と言った。そして福沢が西洋の物質文明を伝えたのに対し、中村は西洋の精神文明を日本人に伝えた、と評した。

では中村が示した西洋の道徳世界とはいかなるものであったのか。『西国立志編』を読んだ日本人は西洋には技芸だけでなく道徳にも優れている面がある、と感心した。次の逸話はその一例である。

一千八百五十二年第二月二十七日、英国ノ船、アフリカ海岸ニ沿テ行ケルガ、忽チ船ノ底ハゲシク暗礁ノ中ニ透リ入り、暫時ノ間ニ、破レ沈ミヌベシト思フ程ナリ。暁第二時ノ事ナレバ、衆人睡リ居タリ。太鼓ヲ播鳴シ、歩兵ヲ船上ニ召バ、操練ノ時ノ如クニ集ル。サテ「婦人小児ヲ救ヘ」ト言ヘル声聞コユレバ、時ヲ移サズ、船底ヨリ寝巻ノママナル婦人小児ヲ引揚ゲ、数箇ノ小舟ニ移シ拽キ去ラシム。コノ小舟、既ニ大船ヲ離レシ時、頭人人心ナク喚ハリテ、「水ニ泳グコトヲ能クスルモノハ、跳リ入りテ、カノ小舟ニ取り付ケヤ」ト云ヒシカバ、船長ライイト「否々、モシ然セバ、カノ婦人ヲ載スル船ハ覆ルベシ」ト云ヘバ、船中ノ人ミナ堅ク立テ動クモノアラズ。抑モコノ外ニ余レル小舟一隻モナク、危難ヲ逃ルベキ望ミアラズ。然レドモ衆人心平ラカニ気静カニシテ、一声ノ怨言ナク、一声ノ啼哭ナク、祝喜ノ火ヲ焼キツツ、コノ一群ノ英雄、船ノ沈ムニ随ヒ、波濤ノ中ニゾ葬ラレケル。

嗚呼、カクノ如キ勇剛ニシテ、シカモ和静ナル美ジキ人ノ儀範ハ、万世ノ後マデモ、永ク存シテ、涙ザルベシ。

徳川時代日本の儒者の多くは、中国や韓国の儒者が科挙の試験によって官の資格を得たのと違って、侍階級の出身、すなわち武士であった。武士は命を捧げて主君に仕える。その武士たちは職業的矜持から孔子の教えの中で、「士ハ身ヲ殺シテ仁ヲ成ス」の教えを尊んだ。士はたとい自分の身を犠牲にしても仁義を行なう、死んでもよいから人の踏み行なうべき道を行なう、と言ったのである。だが実際問題として、清朝シナにも李朝鮮にも徳川日本にも、船が難破して女子供を救うために自

分は死んだという儒者の話は聞いたことがない。日本人は儒教道德の感化を受けていたから、スマイルズの語る話に儒教道德の実践を見る思いがして感銘したのである。

中村はヴィクトリア朝のイギリスで生活して、女子供が大事にされていることに感心した。イギリスのホームというのはいいものだ、と思ったにちがいない。ロバート・ブラウニングは Love is Best と夫婦愛を詩に歌ったが、中村もブラウニングを引用している。そしてイギリスの lady という理想を日本にも移し植えたいと思った。中村は、「男女ノ教養ハ同等ナルベシ。二種アルベカラズ」と主張した。

中村が『西国立志編』や『自由之理』を訳して天下に名を知られると、明治政府も有能の材をほっておきはしない。中村を沼津の田舎から東京に呼び出した。やがて中村は大曲に同人社という塾を開いた。これは明治初年官立の学校が整備される以前は福沢の慶応義塾と並んでもっとも人気がある私塾で、中村は江戸川聖人と呼ばれて尊敬された。人気があった理由の一つは慶応義塾も同人社も西洋文明を教えてくれたからであろう。より具体的には英語を外人講師が教えてくれたからであろう。それが可能となったのは福沢も中村も印税収入があり、それで西洋人教師を雇うことが出来たからであるまいか。中村は斬新なことをした。『論語』では男女は七歳で席を同じうせず、と教えているが、女子の入学を歓迎したのである。東アジアからの最初の留学生を迎えたのも慶応義塾と同人社であった。中村は明治初期の日本で非常に尊敬された学者であったけれども、出身が幕府方だから明治政府の中核にはいって働くことはできない。また政治家向きの人でもない。それで教育界で重きをなすにいたったのである。お茶の水は徳川幕府のアカデミーであった昌平黉ゆかりの地だが、そこに女子師範学校、付属女学校、幼稚園が開設されると決まった時、請われて初代の摂理、すなわち学長となった。

そこで中村は非常に見事な演出を行なった。明治八年十一月二十九日、女子師範学校の開校式に皇

后陛下の行啓を願ひ出たのである。美子皇后はその年二十五歳、明治元年に一条家から明治天皇より二つ年上の姉様女房として入内されたが、この時はじめて公共の席に臨まれた。中村が西洋における女王、皇后の社会的役割を日本の皇室にも応用したのである。山川菊栄の母青山千世はその時の皇后の容姿を次のように回想している。利発な青山生徒は緊張して、目をこらして、見つめていた。

皇后の髪はおすべからし、お雛様の着つけのように美しく重なった白襟の上に緋ぢりめんのきもの、緋の袴、その上にはおったうちぎは、黄色地に紅で枝菊を浮き織りにしたもの。緋の袴の裾からは爪先のとがったハイヒールがのぞいていました。まだ二十代のうら若い皇后はまことに匂うような美しさ。(山川菊栄『おんな二代の記』平凡社、東洋文庫)

そして中村校長は次のように祝辞を述べた。

謹^{おもん}テ惟^{おもん}ミルニ、邦国文明ハ政治ノ善ナルニ關係シ、政治ノ善ナルハ家法ノ善ナルニ關係セリ。而シテ家法ノ善ナルハ婦人ノ心志端正、知識長進、及ビ操行ノ善良ナルニ由レリ。我国古今善行アル婦人ニ乏シカラズ。然レドモ邦国惣体ヨリ之ヲ觀レバ、婦人教養方法ハ甚ハダ欠タリトイフベシ。今ヤ文明ノ化漸ヤク進歩ニ趣^{おもむ}ギ、東京女子師範学校ノ設ケアリ。即ハチ今日臨^か駕^りアリテ開業式ノ盛挙アルヲ致スハ億兆人民ノ共ニ慶スベキコトナリ。仰ギ望ムラクハ、後^{うしろ}来^{らい}此^こニ在^あリテ學習卒業スルモノ善キ婦人トナリテ夫ヲ輔^{たす}ケ、善種ノ人民ヲ生育シテ我国ヲシテ福祉安寧ノ邦タラシメンコトヲ。敬^{つし}ンデ祝^いス。

この祝辞は一方では儒教の『大学』の修身・齊家・治国・平天下の教えを踏まえ、その延長線上に

女子教育を位置づけ、旧来の価値観に合致するように配慮し、他方では時代の大勢となった文明史観を強調し、進歩の一つのあらわれとして女子教育を肯定した。それは儒学者であると同時に洋学者であった中村らしい折衷主義の主張といえよう。いつの時代でも新しい考え方は、なんらかの意味で旧来の伝統に連なることで市民権を得るものである。新旧二つの発想は混在し、共存していた。それによく見れば皇后様も日本のおきものを召しながら、履物には西洋のハイヒールを履いていた。

校長の挨拶に続き生徒の一人が御前講読をした。それはほかならぬ中村校長訳の『西国立志編』の一節であった。そしてその後生徒たちは控えの間で、金屏風を背にほのかに笑みをふくむ美しい皇后さまに御挨拶し、文部大臣の手から御褒美の製図用具一式を頂戴した。美子皇后はフランクリンの十二徳を和歌に詠まれたが、その一つ「勤勞」に手をいれて、

みがかずば玉も鏡も何かせむまなびの道もかくこそありけれ

の歌を明治九年二月東京女子師範学校にくださった。それは敷衍されて「金剛石」の小学唱歌となり、奥好義の曲にあわせて日本国中津々浦々で歌われた。

金剛石も みがかずば
珠のひかりは そはざらむ
人もまなびて のちにこそ
まことの徳は あらはるれ

時計のはりの たえまなく

めぐるがごとく 時のまの
 日かげをしてみて はげみなは
 いかなるわざか ならざらむ

フランクリンの「時間を空費するなかれ。つねに何か益あることに従うべし」の趣旨は小学唱歌の第二連によく出ている。平成の今上陛下はアメリカへ行かれた時、スピーチでこの逸話にふれられた。フランクリンはスマイルズの思想的先駆者である。一七〇六年生まれのアメリカ資本主義の父は God helps them that help themselves 「神ハ自ら助クルモノヲ助ク」という格言を作ったが、一八一二年生まれのスマイルズは Heaven helps those who help themselves 「天ハ自ら助クルモノヲ助ク」というより響きの良い格言に改めたのである。

漢文のたくみな中村は清朝シナから来日した中国知識人と筆談でよく交際した。清国公使館の黄遵憲がお茶の水の女子師範学校に注目し、幼稚園を見て、漢詩にうたっていることは知られている。

この中村と清朝シナの改革派知識人との交際は注目に値する。次の引用は『自助論』第一編序だが、興味深い発言である。

余是ノ書ヲ訳ス。客過ギテ問フ者有リ。曰ク、「子何ゾ兵書ヲ訳サザル」。余曰ク、「子兵強ケレバ則チ国頼ミテ以テ治安ト謂フカ。且ツ西国ノ強キハ兵ニ由ルト謂フカ。是レ大イニ然ラズ。夫レ西国ノ強ハ、人民篤ク天道ヲ信ジ、人民ニ自主ノ権有ルニ由ル。政寛くわん、法公ナルニ由ル」。

それから二十五年ほど後の一八九七年、康有為は『日本書目志』を著わしたが、そこにこう書いてある。

泰西ノ強キハ軍兵砲械ノ末ニ在ラズ、而シテ其ノ士人ノ新法ノ書ヲ学ブニ在リ。

これが中村の言葉に共感した康有為の言葉であることは明らかだろう。楊昌済は日本と英国に留学し、毛沢東の最初の妻の父だが、一九一六年から七年にかけて雑誌『新青年』に寄稿し、次のように述べている。

天ハ自ら助クル者ヲ助ク、トハ乃チ英国教育家ノ格言ナリ。人々独立ノ精神有リテ、スナハチ独立ノ国勢ヲ鑄成スベシ。

「明治維新は中国革命の第一歩」と言った人は孫文だが、明治日本の近代国家建設が刺戟となって近代化革命の動きは東アジアの各国にひろがった。興味深い刺戟伝播は韓国の崔南善（チェ・ナムソン）の場合である。一八九〇年に生まれた崔南善はスマイルズなどと同じく「中人」の家に生まれ、日露戦争が始まった年に日本に留学、文章救国運動を起こした。日本の代表的な印刷所秀英舎の助けを得てソウルの自宅に出版所を設け、月刊雑誌『少年』を創刊した。ちなみに秀英舎は『西国立志編』を出して大をなした印刷所である。崔南善はその『少年』誌上にスマイルズを紹介したばかりか、日本語訳から重訳して一九一八年には『自助論』の第六編までを訳出した。崔南善の「自助論序」には「嗚呼、自主自立ノ要、吾人ヨリ急ナルモノ何処ニヤアル」などの言葉が見える。韓国が日本に併合されたのは一九一〇年であるから「自主自立ノ要」の語は特別の意味合いを持つ。そこで繰返し唱えられるのは、個人の自助とともに、民族の自助である。スマイルズが唱えたのも Self-Help, national and individual「国家としての自助と個人としての自助」の必要であった。第一次世界大戦

は終結し、年が明け、アメリカのウィルソン大統領は民族自決を唱えた。個人として自助自立を願う者は民族としても自助自立を願う。こうして「セルフ・ヘルプ」の精神の論理的帰結として崔南善は一九一九年、『三・一独立宣言書』を執筆するにいたった。「我等ハ茲ニ我朝鮮国ノ独立タルコト及朝鮮民ノ自由タルコトヲ宣言ス……」

この崔南善の『独立宣言書』の執筆にスマイルズの「セルフ・ヘルプ」の発想が直接的にとはいわずとも間接的に働いていたとはいえるかと思われる。

中村正直は西洋から帰国する船上で *Smiles, Self-Help* を読み、深く感銘を受け *Heaven helps those who help themselves* の格言を「天ハ自ら助クルモノヲ助ク」と訳した。そして号を敬宇とした。宇宙の宇で天と同じ意味であろう。中村敬天では落着きが悪いから敬宇と号したのであろう。中村はキリスト教的西洋にも儒教的東洋にも共通する教えは「敬天愛人」だと考えた。

ところで「天ハ自ら助クルモノヲ助ク」という時の「天」を讀者はどのように感じるだろうか。「天助自助者」と中国語でいう時、中国の人はこの「天」に何を感じるだろうか。日本人は「お天道様」の「天」のような神道的な「天」ないしは儒教的な「天」、中国人はやはり儒教的な「天」を感じるだろう。しかし西洋人は *Heaven helps those who help themselves* の *Heaven* にキリスト教の *Heaven* すなわち *God* を感じるのではないだろうか。スマイルズが一八五九年に *Self-Help* の冒頭に掲げた格言がフランクリンが一七五八年に暦に書き込んだ格言 *God helps them that help themselves* の書き換えだということは前にも述べた。

とすると中村が唱えた敬天愛人の「天」とはいかなる天であるのか、ということが問題になる。この敬天愛人という言葉は日本では西郷隆盛の愛した言葉として知られる。西郷は度量の大きな人で、沼津に都落ちしていた中村のもとに薩摩藩の部下をつかわし、中村の教えを受けさせた。それで中村の教えが西郷に伝わったのである。そして西郷の口から敬天愛人の言葉が発せられると、おのずと東

洋的な天の感じがしたのである。中村の同人社には韓国から留学生が来ていた。その人たちを通してだろうか、敬天愛人の教えは朝鮮半島にも伝わり、金大中大統領は座右の銘として「敬天愛人」の書をしばしば人に示した。

渡英以前から中村は昌平黌の教授として、禁書とされていたキリスト教関係の漢文著述もひそかに読んでいた。そしてキリスト教のゴッドと儒教の天は同じであり両者は共存可能である、と思いでいた。中村は奉教士人などといわれた明末の徐光啓などの漢文著述を読んでいたから、一時期誤ってそう確信したのである。しかし儒教の天とキリスト教の天主を同一としたのはマッテオ・リッチ（二五五―二六一〇、漢名を利瑪竇というイエズス会宣教師）がキリスト教布教の方便として考え出したもので、ローマのヴァティカン当局は結局そのような適応政策を認めなかった。それやこれやで一時期キリスト教徒になったかに見えた中村は晩年転向したらしい。一八九一年、明治二十四年に亡くなった時、葬儀は神道で執り行なわれた。日本における知識人の転向はたいへん興味深い問題である。コミュニズムからの転向は普通結構なことと思われる。あるいはそれと似たようなプラス評価が明治期の日本人のクリスチャニズムからの転向についても下される日も来るかもしれない。ラファディオ・ハーンは「西洋人宣教師は日本人の教え子が優秀であればあるほどキリスト教に留まる期間が短いことを発見して驚きかつ衝撃を受けた」と『ある保守主義者』の中に書いている。ところどころの葬儀の時、中村の柩に従ったのは目の不自由な人、耳の不自由な人たちであった。それというのは日本で盲人のために盲学校を聾啞者のために訓練校を最初に開いた一人も中村正直だったからである。

日本にとって西洋文明を導入する際、最初に中村がスマイルズ『セルフ・ヘルプ』を一八七一年に訳したことは幸せであった。中国で最初に大評判となった西洋書物の翻訳は嚴復がトマス・ハックスリーの *Evolution and Ethics* を『天演論』と題して日清戦争後の一八九八年に訳した本である。「物

競ヒ天摂ブ、適スル者ノミ生存ス」というソーシャル・ダーウィニズムの教えは西洋列強によって半植民地化の憂き目にあいつつある中国の人にとっては弱肉強食の帝国主義の時代の性格を強く印象づける上では役立った。だがその『天演論』にはスマイルズの書物のような産業国家建設の見取図がなかった。そのことは中国にとっての不幸せであったといわねばならない。

もっとも今日の文学評価では *Self-Help* という書物はおよそ審美的価値を欠いた、たいへんつまらない作品とみなされている。一九二二年ジョージ・サンソムは *Japan, a Short Cultural History* の中でこう評した。

It was unfortunate that, when at last the Japanese had time to consider the nobler efforts of the Western mind, it was the dreary ratiocinations of Herbert Spencer or the homiletic of men like Benjamin Franklin and Samuel Smiles which seemed best to stay their intellectual pangs.

『日本文化史』を書いていた当時の英国外交官は、ブルーストの『失われた時を求めて』を読んではフランス大使と談笑していた。そのような趣味の人にとっては明治初期の日本人がようやく西洋の精神世界の存在に気づいた時、数ある作家・思想家の中でなぜよりによってスペンサーのような無味乾燥な推理推論やフランクリンやスマイルズのような説教に惹かれたのか解せず、不幸な出会いとは思えなかつたのであろう。しかしそのサンソムは二十年後の次著『西欧世界と日本』では、書物の性質上、西洋のチャレンジにリスpondした日本知識人に着目し、福沢と並んで中村を取り上げた。そしてそれと同じような見地から明治維新を観察したマリウス・ジャンセンは一九六〇年代『日本における近代化の問題』でスマイルズと中村に着目した。維新後、身分制度が解体し、突如として社会

的流動状態にさらされた日本人は『西国立志編』に教えられ、刻苦精励することによって不安と困難を乗り越え、名をあげてを教えられた。ただ単に「家名」をあげるといふ個人レベルだけのことでなく、国家レベルでも、日本人はこのスマイルズの『自助論』を通して、

「日本はいまは国際社会のなかの貧乏少年にすぎないが、勤勉と志と節儉の実行によってやがて富裕の国となることができる」

という確信を深めたのである。そしてその際、フランクリンやスマイルズが「西洋ノ師」といふ説教者として新たに登場したからこそ、かつて孔子を敬いその教えを「子曰ク」と有難く承った日本の書生たちにたやすくアッピールしたのだと観察したのである。そのように師の語録を盲目的に信奉するのは旧弊である、という批判ももちろんそこにこめられていた。

それでは十九世紀後半の英国と日本との間には倫理的雰囲気で共通するところはなかったのだろうか。ジェントルマンという人間の理想と士という人間の理想との間には通ずるところがあった。ヴィクトリア朝のイギリスのパブリック・スクールでのギリシャ・ラテンの教育は、先哲の教えを授けることでジェントルマンの養成を目指していた点、中国や朝鮮や日本の塾での漢文教育が聖賢の教えを授けることで士の養成を目指していたことと多くの点で共通する性格をもっていた。両者はともに知識の伝達よりも若者の性格の養成に重きを置いていた（『論語』の英訳者アーサー・ウェーリーもそのような見方を述べている。ちなみに、オクスフォードやケンブリッジの卒業生同士の友情と科挙及第者の友情についても共通するものがあると観察している）。

社会風俗の面でも、ヴィクトリア朝イギリスは小説を読むことを若者に有害として禁ずるような側面があった。それは儒者が小説を読むことを良しとしなかったのと同様であった。（もっとも若き日

の中村正直は『水滸伝』に読み耽った。その小説を有害視する見方は明治時代には強かった。偽善をも含めてその二つの社会のやや硬直した道德観には通ずる面があった。そのような中でスマイルズが道德を説く師として孔子と似た聖人扱いをされたことは間違いない。そのような日本で出来上がったスマイルズのイメージから、Samuel Smiles, a Victorian Confucian という定義もまたできないわけではない。「ヴィクトリア朝イギリスの孔子の徒」という見方である。そんな見方を西洋へ逆輸出させることも不可能ではないであろう。勤勉、節制、規律、誠実、中庸、平静、謙讓など『論語』に基づく人格陶冶の徳目と『西国立志編』に基づく修身の徳目とはきわめて多く共通している。しかしこの際「孔子の徒」という呼び方は、揶揄や軽侮のニュアンスを含む語として、西洋の知識人の多くには響くことであろう。

セルフ・ヘルプはスマイルズや中村が説いた人間の生き方の基本だが、最後に自助と自己中心主義は違う、ということも言い添えたい。バーケンヘッド号の将兵が人々を感動させたのは彼らが Ladies first というジェントルマンの教えを身をもって実践したからである。他人の助けを当てにしてはいけないが、しかし他人を助けることには人間としての尊ぶべきなにかがある。それでは親はどこまで子供を助ければ良いのか、教師はどこまで学生を助ければ良いのか、先進国は開発途上国をどこまで助ければ良いのか。それは相手が自立できるように助けることが大切なのである。相手が過度に甘えることを許してはならない。またこちらが援助することによって相手を支配することを考えてはならない。私の結論「他人が自ら助けケルコトノデキルヨウニ助けヨ」を私なりの英語でいうところなる。

Help others help themselves

懇談と質疑応答から

中国の中華思想に媚びてはいけぬ。それを正すのが教育ですからシナとはつきり言われた方がよい。新井白石はチイナといいました。シドッティから聞いたイタリア語の Cina の音訳です。それに漢字を当て字して支那となった。支店の支は漢字の意味が悪いというなら片仮名で書けば宜しい。

麗澤大学の名前を聞きまして思い出したのは一九八五年にこんなことがございました。私は当時台湾の淡水にある淡江大学へ集中講義に教えに参りました。台湾ですから時々スコールというのですか、雨がにわか激しく降ります。学生が教室のある建物から別の建物へ移動する時、広いキャンパスに渡廊下があるとところもあるがないうちも多い。それで雨が降ったとき、学生が誰でも自由に使えるようにと大学当局が傘を入口出口の傘立てに多数配置しました。そのアイディアはなんでも淡江大学が留学提携の協定を結んでいた麗澤大学で行なわれていることを見習った、どうか真似たのだそうでございます。ところがしばらくしてから淡江大学の学部長先生が嘆くには日本の麗澤大学ではその傘はなくならないらしい。しかるに淡江大学ではあつという間に傘がなくなつてしまつた。学生たちが自分の下宿や家へ持つていつてしまつたのだらう。日本の麗澤大学はモラロジーといつて道徳教育を施しているから、学生たちのモラルが高い。淡江大学の学生とは道徳水準がちがう、とお嘆きになりました。

しかし私はこれは単なる学生の道徳水準の問題ではなく、また民族の道徳性の問題でもなく、国民の経済水準の問題がからんでいるのだらうと思ひます。というのはそれから二十年後に台北へ教えに参りましたら、喫茶店でもお店でも店頭で傘立てがあつて皆さんそこへ傘を立てて取られるなどという心配はおよそしないで店内で長い間コーヒーを飲んだりお喋りをしてゐる。それでは経済水準

が向上すれば傘はなくならないか、というところもいえない。改革開放以前の大陸中国は相互監視の目が光っていたということもありますが盗難はおそらく今よりよほど少なかった。いま中国大陸は経済的に大発展している。しかし貧富の差が世界一激しい国ですから、傘は自分で持っていないとすぐ取られてしまうだろうと思います。このように見ると道徳は漢民族の民族性の問題でもなさそうです。

それではひるがえって日本はどうでしょうか。近ごろ私の近所の病院では「傘はビニール袋に入れて各自お持ちください」と掲示がしてあります。してあるけれども、みんな入口の傘立てに無造作に傘を立てています。ではなぜ病院は掲示を出したか。病院では傘立てに放置した傘が時々なくなる。間違えたのか故意か知らないが紛失する。すると病院側に強硬に苦情をいうお客さんがいる。それで「傘も靴もビニール袋に入れて各自お持ちください」と掲示して、たとい傘がなくなっても病院は責任を負いませんという対抗策をあらかじめ打ってあるわけでありました。道徳は抽象的に唱えるだけでは実態はわからない。モラロジーには社会学的考察がないと、単なるきれいな事を唱えることになってしまいます。

漢学にはきちんとした守るべき道徳律が示されていたが英学にはない。しかし戦前の英語教科書は道徳教育の宝の山でよいエピソードがたくさん盛られていた。

良い教科書を用いること、そして英語教育の根本は徹底した文法分析による古典講読が不可欠です。中村正直もそれを言っています。

（编者注・本稿は、平成十九年二月九日に開催された、モラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「公開講演会」の内容を収録したものである。）